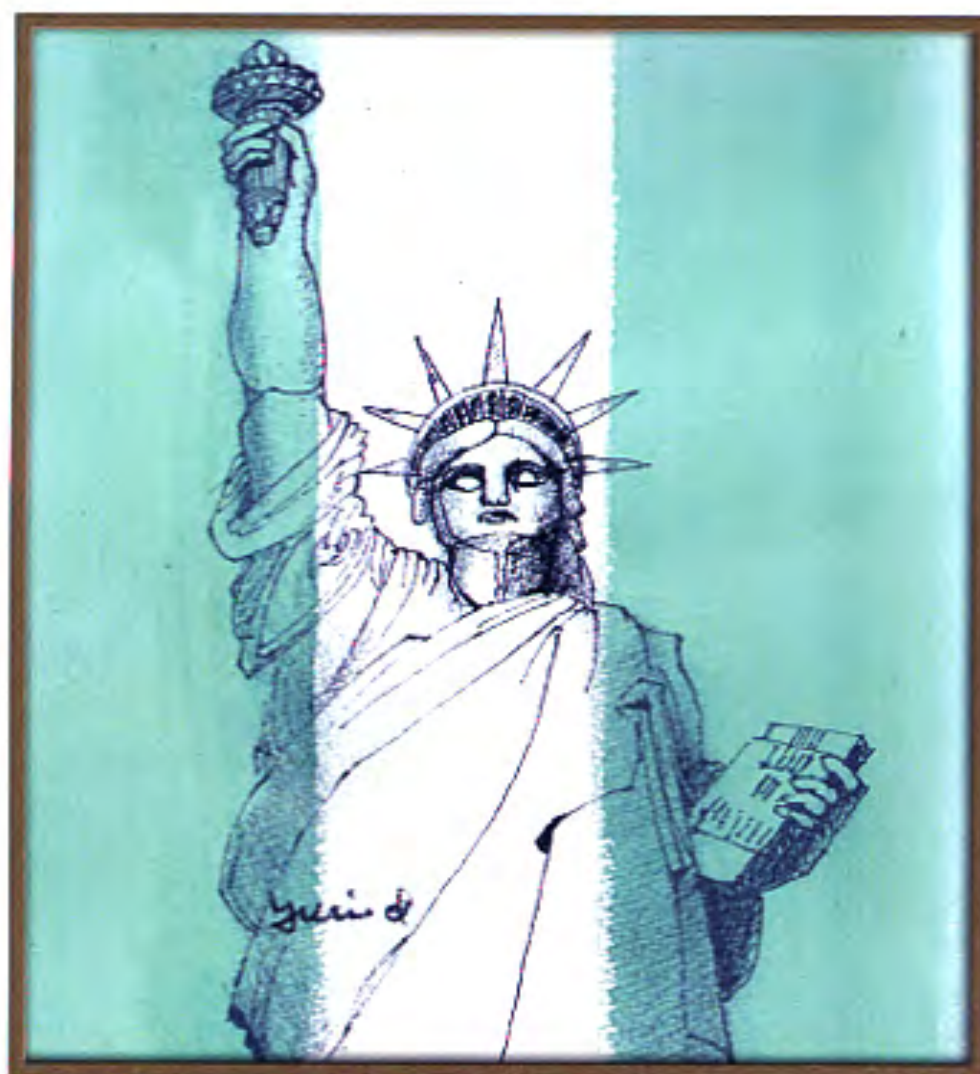


熟年俳句誌

2 2013年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(十四)

佐藤喜仙

川濁り桜紅葉を映し得ず

苦瓜の枯れの兆しに蔓引かれ

秋草の繁みを犬の尾が進み

残照に影深まりぬ芒の秀

竹伐つて墓石に日差し当てにけり



この道に盆の火影のただひとつ

見上ぐれば蒼空汚す石榴かな

立冬や霧のなかから通勤者

冬の日や袖に絡まる千歳飴

百骸に山気しみ入る霜のこゑ

打ちつける破堤の波や冬の月

木の葉散る我をめぐりかけて散るごとし

かきね集

白選句集



「町の灯」

松本周二

湯豆腐や昨日のことに拘らず

丹前に偲べり父の赤ら顔

つくばひの木の葉絡めて初氷

沈めるも流るるもあり冬紅葉

海に灯を映す都会の冬景色

電飾に身の浮くやうな師走かな

「鴨布陣」

古川千鶴

鴨布陣中州は作戦会議中

孫悟空の雲の絨毯神の旅

むしろ旗立てしは昔木守柿

傾ぐ身を翹で支へて冬の蝶

かけ大根伊吹嵐に身を縮め

芒原風の行方の定まらず

「暮早し」 川井素山

暮早し席ゆずり合ふ馴染み酒肆
満艦飾手振りを交はす秋の晴
生みたての卵の温み冬の朝
キャバレーのピエロが踊る冬帽子
寒雀傾ぐ案山子に止まりをり
餅搗や慣れぬ手付の若夫婦

「箱根駅伝」 安藤虎酔

初春の風受け走る箱根駅伝
葛の葉の生命力を恐れけり
投げられて痛きを堪ふる寒稽古
柚湯とて首まで浸かり長湯せし
日溜まりにうつらうつらと長閑なり
寒さには負けじ早朝ランニング

「雪」 菅原 孟

をりをりに湯煙噴くや冬の富士
白川郷雪に粧ふ堤の木
雪晴の月山鳥居凜と立つ
吹雪く森俄か飛び退く鳥の群
尾袋沼狐に後を付けらるる
豆撒きを受くる年もありバケツにて

「空目指」 田島昭久

寒木瓜の蕾をつけて去年今年
公孫樹散る落葉の道や野鳥鳴く
歳末を身内で過す三世代
満天星は林の中で紅葉増し
冬薔薇色どりゆたかも人は無し
大木の思ひのままに空目指す

撫子集

主宰選



米田文彦

夕闇に紛るるもあり浮寝鳥
日の没りや影絵となれる浮寝鳥
足とめて垣越しに見る散紅葉
濡縁に浮き立つ木目冬の寺
ガイドのこゑ聞きつつ濡るるしぐれかな

本郷宗祥

メモを手にあれやこれやの年の暮
冬うらら猫とまどろむ昼下り
散紅葉縮みてもなほ紅残し
穏やかな濃淡となり冬紅葉
隣人と落葉を見ては語を交す

長久保郁子

ぼろ市やたてよこななめの声のとぶ
ぼろ市やはぐれし人を呼ぶマイク
ぼろ市や代官行列ゆつくりと
ぼろ市や時鐘の音かき消しぬ
ぼろ市や出店解体して終はる

小池清司

頤に歳あらはるる炬燵かな
木枯しに押されて刻む万歩計
予報士をタレントにする寒波かな
懸大根駅伝の子ら走り過ぐ
緋袴の搔きし落葉や万華鏡

寒月に木星近く寄り添うて

岡野安雅

年忘れ心齋橋の鯨鍋

遠くとも近くに見ゆる真夜の火事

潮を吹く鯨見物室戸岬

野良猫の神社に集ひ冬来る

年忘佳き歳祈り手を締むる

青木英林

雪吊の水面に浮かぶ影揺るる

裸木や向かひのビルに人の影

白菜の出来栄え愛でる畑仲間

公園に子の声も無し冬ざるる

白菜の白さ目に入る朝の膳

山本達人

浮雲が紅葉を渡る散歩道

日だまりに枯葉とあそぶ子犬かな

受け継ぎし美しき着物の七五三

風やみて雪雲切れて星一つ

雁のこゑを映せし近江の海

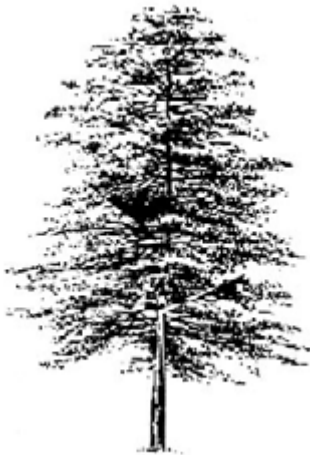
小林美登里

大正の茅葺の庵一葉落つ

秋立つや妙義奇巖は空の奥

境内でお札売る婆菊日和

荒れ庭の夜を鳴きつぐ虫の声



那須野集

主宰選



湯けむりに落つる夕陽や山眠る

丸山酔宵子

銀杏散り風に吹かれて山つくる

後藤克彦

空風に絡む暖簾やけむり沁む

赤白と山茶花垣根道へだつ

夕闇やパチパチ燃ゆる落葉焚

木守柿残りついでむ鶉の群れ

暗がりの微光に浮かぶ寒椿

教え子に酌をせらるる年忘れ

掃き終へし庭に疾風また落葉

霜柱踏み音奏づる子供達

アメ横に塩辛声や歳の市

池内とほる

文庫本まぎれこみたる銀杏落葉

柳出皓一

北風に骨身を晒す白樺

夜白らみ体すくむる布団かな

蒼空を区々にくぎりて冬木立

山茶花や身の上話聞かされて

青梅線始発の窓に霜強し

荒庭の枯草の茎尖りをり

不揃ひの蕪括られて道の駅

銀杏散る人海戦術の竹ぼうき

今日も来る喪中のはがき木の葉髪

橋本修平

冬木立白き遠嶺幽かなり

長島清山

霜柱踏みたる犬のけげん顔

原書読む居間の窓より冬木立

煮凝りになりて喜ぶ女房どの

枯蓮にたぢろぎ一步退がりけり

胼の手に負担をかけぬ無洗米

街燈に雪が積もりぬ酒すする

あはれかな蟻に引かるる冬の蝶

冬の夜や選挙速報見て更けぬ

騒がしや選挙談義の忘年会

吉田博行

陽を浴びて綿虫の舞ふ湖畔かな

田中清秀

大和路や紅葉の陰に石の塔

青鷺の頭うづむる雪催

夕紅葉陰を落せる大伽藍

秋空に湖すべる観光船

紅葉舞ふ疎水に浮かぶ二羽の鳥

苔生ふる茶室にかざる落葉かな

紅葉と緑に浮かぶ銀閣寺

黄落の神社の庭に蒸籠の香

置炬燵膝のみかんの光かな

菊地崇之

雪催早々ともる外灯かな

森岡陽子

蕪汁酔ひたる朝の腹休め

银杏落葉本に扇の栞かな

初春の肌に覚えの陽の温み

老木の根元に冬芽と朽ちし枝

寄鍋や家族が揃ひ笑顔咲く

風止みて落葉の筏とどこほり

寒風に身震ひをして歩を進む

高々と担ふ熊手のおかめかな

見上ぐれば万華鏡のごと照紅葉

和田勝信

杉木立間にぼつぼつ寒桜

熊笹に朴の落葉の懸りをり

杉の根を踏みて紅葉の奥の院

雪催伸びたる櫓の黄ばみけり



撫子集・那須野集鑑賞十二月号より

客員 村上克哉

撫子集

色変えぬ松と向き合ふ書齋かな

田島昭久

晩秋に木々が紅葉したり、落葉したりするなかで、変わることなく緑の松は美しい。最近では松喰い虫に荒らされ枯れるものが見受けられるのは残念だ、常磐の松が色変えないのは当然ではあるが如何にも頼もしく感じられる。黒松や赤松は二十メートル以上の高木、読書か作句に疲れふと庭へ目を移すと、松の緑に癒され力得るのである。

風止みて香の漂よへり藤袴

米田文彦

秋の七草の一つ、古歌には蘭と称されている。奈良時代中国から伝来し帰化した。一メートルほどの茎の上に淡紅紫色の花が房状に纏まって咲く、生のままではさほど香らないが、葉は茎とともに赤味を帯び芳しい香を出す、半乾きにすると桜餅の葉に似た香りがすると言う。爽やかな秋風が止み仄かに藤袴の香が漂っていた。

さはさとはすすき揃ひて池の端

本郷宗祥

夏には「青芒」冬には「枯芒」の季語がある、すすきは秋の七草の一つ。風に靡く一望の芒原で秋の陽光に透ける穂は美しい。日本の各地の山野で普通に見られ、八―十月頃茎の先に長さ二十センチ程の花の穂をつける。池の端の芒が秋風に一揃に靡いている爽やかな様が目に浮ぶ。

新蕎麦に蘊蓄そへて啜りけり

小池清司

寒暖の差の大きい山間など比較的やせた土地に栽培される。蕎麦は信州が名産地であるが、昨今は北海道、中国、タスマニア産などもある。夏蒔きの一部に限って一ヶ月早めの十月頃十分熟さない蕎麦を刈り新蕎麦を打つ、鮮度が良くコシも風味も格別である。お品書きに達筆で新蕎麦とあれば蕎麦通ならずとも蘊蓄を傾け啜りたくなる。(以下略)

伝言板

1 第十四回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年2月8日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第十五回本部句会

①日時 2013年3月8日(金)

14:00～17:00

その他事項は第十四回と同じ

3 第十四回吟行(原則第四火曜日)

日時 2013年2月26日(火)

場所 上野公園・子規庵・羽二重団子

集合 JR上野駅公園口改札出たところ 11時

昼食 「豆腐料理」「笹乃雪」

句会場 「羽二重団子」2階

句会 14時00分～16時00分

出句数 喉目3句

費用 交通費・入庵料500円・

昼食2000円から・

会場費1400円(団子つき)

各自負担

申込み 喜仙宛2月20日まで

(FAX又はTEL)

4 第十五回吟行

日時 2013年3月26日(火)

場所 目黒川沿いお花見

集合 JR目黒駅改札出たところ 11時

昼食 未定

句会場 中目黒住句センター会議室

出句数 3句

詳細は次号にて

5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、

ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品(十

句)、随筆、その他論文等をいつでも

投稿することができます。お待ちいた

しております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」に
なれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者

は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。